

2025 年 7 月 19 日 信州イスラーム世界勉強会

第 48 回 分断と混沌の世界に立ち向かう

～ウクライナ、ガザ、イスラエル、米国、そして日本～

概要報告

松本会場：Free Gaza 北杜、本読みデモ企画、NPO 法人 HCC グループ、パレスチナに連帯する東洋大学学生有志、信州大学法経学部学生、信州イスラーム世界勉強会会員など約 55 名

札幌会場：パレスチナ連帯スタンディングほか 約 10 名

オンライン参加者：約 10 名

第 1 部 淵源を掘り下げる 13:00～15:00

Oxford Union のディベート（2023 年 11 月）に登壇したスーザン・アブルハワー Susan Abulhawa（作家、在米パレスチナ人）の演説録画を視聴（約 20 分）。日本語翻訳字幕付（毬谷友子さんによる）

<https://x.com/mariyatomoko/status/1871732118092738675>

（英語動画）<https://www.youtube.com/watch?v=2ZCWCGebAuU>

登壇者のプロフィール https://en.wikipedia.org/wiki/Susan_Abulhawa

講演； 13:30～15:00

○永原 陽子（京都大学名誉教授、アフリカ史）「USA/イスラエル/南アフリカと私たち：植民地主義を軸に」 【講演要旨参照】

- ・世界の各地で噴出する（過去と現在の）植民地主義との攻防、一つのモデルとしての南アフリカ共和国の歴史への向き合い方
- ・植民地主義を「不正義」と認めることから出発、憲法自体にリドレス（矯正、補償）の考え方を埋め込み、旧受益者と被抑圧者の共存を図る。
- ・植民地主義の過去を克服しようとする動きを、現在の植民地主義の尖兵であるアメリカ/イスラエルが敵視している状況

・下村 由一（千葉大学名誉教授、ドイツ近現代史）「反ユダヤ主義を軸に」 【講演要旨参照】

- ・ヨーロッパ・キリスト教世界のユダヤ教徒 イエス殺しの罪の担い手として生きねばならない/イエスの教えの生き証人/差別される存在として残す。

実際には隣人として暮らしていたが、十字軍遠征以降のキリスト教社会で、敵はイスラムとユダヤとされる。

- ・19 世紀 近代国家において市民権を得る、「モーセの教えを信じるドイツ人」
- ・第一次世界大戦後、反ユダヤ主義 Anti-Semitism の強まり。 セム人 邪悪の極み ←→ アーリア人 文明の担い手。 ドイツ（国家、国民）を苦しめる存在 → 1935 年 ニュルンベルク法（市民権剥奪、ドイツ人との混血禁止） → ヨーロッパから放逐する、あるいは、ガス室へ。

- ・シオニズム:パレスチナの地にユダヤ人国家の建設を目指す運動。ロシア・東欧のユダヤ人が熱狂的に支持。
- ・シオニストと西欧国家は、イスラエルを作ることによって、反ユダヤ主義(という差別と分断)を他の世界に輸出した

第2部 分断を乗り越える 15:10~17:20

○市民団体をつなぐ:スピーチ(活動と展望)

○札幌パレスチナスタンディング(札幌市)

- ・「イスラエル VS ハマス」という報道(の枠組み)をどう乗り越えるか。
ガザの現状: 国家対国家ではなく、軍事国家が民間人を攻撃する。なぜそれを止められないのか? 欧米のイスラエル支持/ダブルスタンダード
- ・「日本人ファースト」という民族排外の言説に対し、有効な言葉が作れていない。
- ・国際的なつながりの世論をつくること。コロンビアのボゴタでの国際共同宣言(7月15-16日コロンビアで開かれた「パレスチナに関するボゴタ緊急閣僚会議」 ガザ・ジェノサイドを止めるための6つの行動方針を含む共同声明を採択。

英文記事 <https://thehaguegroup.org/meetings-bogota-en/>

同会議でのパレスチナ占領地問題国連特別報告者アルバネーゼ Francesca P. Albanese の講演録画(日本語訳音声、英語字幕付)

<https://www.youtube.com/watch?v=AGyip5vhhE4>

○Free Gaza 北杜 (北杜市) 事前資料「活動記録」参照

- ・BDS 運動

FANUC(ファナック)社 産業ロボットを製造(山梨県忍野村に本社)、イスラエルのエルビット社や米国企業で砲弾を製造、ガザ攻撃に使用される。同社の人権方針に背馳している。6月30日に公表された国連のアルバネーゼ報告書「占領の経済からジェノサイド経済へ」の中で、唯一日本企業で名指しされたのは「ファナック」である。

綿半(長野県飯田市に本店あり) ソーダ・ストリームを販売する。

BDS 運動ガイドライン

<https://bdsjapanbulletin.wordpress.com/2024/01/27/%E3%81%A4%E3%81%AA%E3%81%8C%E3%82%8B%E6%8A%80%E8%A1%93/>

ソーダ・ストリームは2015年にBDS運動の圧力を受け、西岸地区の違法入植地における工場は閉鎖しました。一方で新工場が建設されたネゲヴ砂漠も、イスラエル政府による先住のベドウィンの強制立ち退き政策が進む地域のため引き続きボイコット対象になっています。

- ・分断が問題なのか?

○本読みデモ企画(松本市) 事前資料参照

- ・わかる人とわからない人の分断を生まない試み。友だち同士で「わからない」「やだなあ」から始める。
- ・差別する/分断する　そう思っていなくてもそういう状況が生じる、その構造を考える
- ・差別に日々気づくきっかけ、気づく力が必要。
- ・シオニズム/プロイスラエルとプロパレスチナの分断、プロパレスチナと無関心層の分断がある、だから「本読みデモ」をやっている。分断だと思い込むところがある。
- ・ちょっとした疑問を話してみたら、深いところに至ることがある、だから探り探りやっている。
- ・いろんな人の協力、みんなで一緒に考える場をつくっていききたい。

ブログ（催し案内など）

<https://honyomimatsumoto.blogspot.com/>

竹内宏（司会）：松本駅前広場のベンチなどでただ本を読むだけ。通りがかりの人が覗きに来たり本を手にとったりと、人が集まっていき「デモ」になってる。いままでとちがうなにかがある感じた。

○NPO 法人 HCC グループ （大津市） 事前資料参照

- ・2000 年創立、フェア・トレードを主に活動。パレスチナのオリーブオイルや刺繍製品の取扱。パレスチナ・中東に関する講演会開催。
- ・知っている人と知らない人の垣根を低くしたい。
- ・「繋がり合う世界」 食（三方よしの農業）、水俣問題なども。

講演への質問：

永原さんへ「南アのアパルトヘイトは、植民地体制そのものへの批判や制裁があったのか？」

下村さんへ「京都のデモでイスラエル人が乱入し、暴力を振るうことがあった。それにどう接していけばよいのか。

○パレスチナに連帯する東洋大学学生有志 事前資料参照

- ・2024 年 11 月、東洋大学に「停戦声明」を要求する署名運動を行った。東洋大学生の 3.5%を集めることを目標とした（3.5%が変われば社会は変わる）。授業の場をかりて広報をした。1ヶ月半で、学生 372 人、教員 45 人、学外者 760、計 1173 人の署名。
- ・「パレスチナに涙を」（赤い涙）キャンペーン。このイベントは、通りすがりの学生／職員に一人ひとつ、パレスチナで殺された人々を思い「赤い涙」を描いてもらう。事務局の許可をとり、大学内の踊り場で開催したところ、6 時間で白い横断幕が赤い涙に変わった。
- ・東洋大学はウクライナの学生を受け入れ、ゼレンスキーの生中継演説を行なっている。他方、学内でのビラ配りは禁止で学生の自治は不在。

・「大学当局／大学側」という友敵な表現で対立をするのではなく、「大学」という一つの箱を共に運営／運用していくというスタンスのもと、分断がほぐされ混ざり合う環境をつくるべく活動が続けている。

竹内（司会）： 竹内（司会）：12/18の駅前本読みデモも、2週間後には信州大生協前広場に本読みデモのベンチができ、その後あっという間にSNSを通じて、東京、大阪など18カ所へと広がった。様々な人が繋がる場が出来ていき、今日は、なんと10代から90代の人間がこの場に集まっている！

<https://www.shinmai.co.jp/news/article/CNTS2023120400736>

東京新聞記事 2024年5月

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/326220>

朝日新聞記事 2024年8月

<https://www.asahi.com/articles/ASS8103PBS81TIPE00XM.html>

○信州大学学生 （松本市）

- ・下村講演を聞き、「～～人」という言い方の問題を深く考えるようになった。いまの「朝鮮人」問題に関わる。
- ・パレスチナ人というだけで殺される現実がある。他方で、15歳前後の子どもが「神のために命を捨てたい」「敵を殺したい」という。ショックを受けた。解決が難しい。「知ること」「学ぶこと」、知識量の分断を乗り越えることが大切。

○自由討論

鵜飼哲：

- ・ボゴタ声明の賛同国は、ボリビア、キューバ、コロンビア、インドネシア、イラク、リビア、マレーシア、ナミビア、ニカラグア、オマーン、セント・ヴィンセント、グレナダ、南アフリカ（ハグ・グループ）。

ヨーロッパ諸国は加わっていないが、スペインは、パレスチナ国家承認を行い、反ユダヤ主義という批判をしていない。

- ・ヨーロッパ港湾労働者のイスラエル向け武器積込みの拒否運動

<https://labornotes.org/2025/06/european-dockworkers-refuse-load-weapons-aimed-palestine>

イスラエルの到着荷物にステルス戦闘機関連部品があり、イラン攻撃の用意であることが判明した。

- ・グレタ・トゥーンベリさん ヨーロッパ議会議員とともに、支援物資も積みガザ地区へ向かう船を阻止されイスラエルから出国

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250610/k10014830631000.html>

同乗していた欧州議会議員リマ・ハサン（パレスチナ人）も逮捕・拘禁され、EU議会で演説。

<https://www.youtube.com/watch?v=yLS0l-D7G-I>

永原：(大津 HCC の質問に対する回答)

南アのアパルトヘイト解放運動のときに、one man one vote と、one man one bullet の二つのスローガンがあったが、後者は支持をえなかった。真実和解委員会を作り、調査し、格差を埋めるために土地接収も行った。植民地主義の問題を棚上げにしたわけではなく、残した問題を、一つの国家のなかで、正義を回復していくことを目指す、それが植民地主義への取り組み方である。イスラエル国家は解体すべきだとしても、イスラエル人を追放するわけにはいかないだろう。

下村：(大津 HCC の質問に対する回答)

どうすればよいか、正直なところわからない。そもそも、イスラエル人（国籍者）にアラブ系もいて、ユダヤ Jew も一義的ではない。

パレスチナ人とはなにか？ 1948 年イスラエル建国以後にできた概念で、いま、ガザの人びと自身が、自分をどう考えているのか、わからない。二国家共存といっても、イスラエル国家が圧倒的で、現実的な解決でないかもしれない。

わからないことだらけだが、みんなで、ひとつひとつの問題を話し合っていく場をつくることが、救いではないか。

竹内：「日本人ファースト」（外国人は二次的）という主張がでてきているが、パレスチナ人は、一緒に生きていた。

板垣雄三：

パレスチナ問題に長らく取り組んできた者として、まず先程の質疑に関連する発言から。「パレスチナ人」という概念は、1920 年のサンレモ会議でバルフォア宣言実行に向けシスジョーダン（ヨルダン川西側）として枠付けられる「パレスチナ」を英国委任統治領とする決定がなされたことに発する。英国との同盟関係から、日本はこれを強力に推進した。ここで、「パレスチナ人」とはアラブ先住民とユダヤ人植民者との両者を含むものであり、両者を操る英委任統治政府は、毎年、両者を対比する人口調査記録を残すことになる。

1948 年 5 月 15 日にイスラエルの単発「建国宣言」の結果、その国民が「イスラエル人」となり、そこに残ったアラブ住民も下積みイスラエル市民とされるが、郷土から追放され難民として近隣諸国や世界に離散した人びとと抵抗者たちが占領支配から「パレスチナ」解放をめざす「パレスチナ人」意識を強め。1960 年代末からの PLO パレスチナ解放機構の抵抗運動や、1980 年代末からのインティファダ（民衆の抗議抵抗蜂起）を通じて、イスラエル国家に属すアラブ市民までも含め「パレスチナ人」の自覚を高めた。

次に、反ユダヤ主義に関連して、「ホロコースト」認識について。シオニストやイスラエル、さらに「ユダヤ人」差別迫害の歴史を受継ぐ欧米の人びとは、それぞれ、「ホロコースト」の責任を専らナチズムに預けることで、顔を立ててきた。これは偽善である。他

人に責任を押しつけて、歴史の実態を隠している。ナチズムとシオニズムの関係は水と油のような相容れぬ関係とされているが、この「常識」は誤り。シオニズム運動はナチズムにすり寄る手下のナチ協力者だった。1933～39年のナチ独による欧州からパレスチナへのユダヤ人植民（棄民）事業において、これを支える英米両政府と並んで、シオニストは健康な青壮年ユダヤ人植民者男女の選定・送出を担った。30年代末にはパレスチナ総人口の三分の一をユダヤ人社会が占め、土地・職場を奪われた先住民アラブの蜂起（36～39年）を再起不能なまで根こそぎ粉砕する「労働の征服」運動で、48年独立の土台が築かれていた（イスラエル建国を48年前後のナクバ〔破局〕の結果とだけ説明するのは誤り）。この独・英・米・シオニズムの国際事業の終結（第2次世界大戦勃発と同期）で欧州からの棄民が困難になると、欧州に残る〔老人と子どもの人口比高い〕ユダヤ人の強制収容所でのジェノサイドの企て＝ナチス版ホロコーストへの転換となる。欧州でのユダヤ人殺害の残虐な修羅場の傍らで、パレスチナではシオニストが先住民アラブを残忍に圧殺する植民地主義の横行があった。この対照的情景の片側を無視してユダヤ民族の運命を単色化する「ホロコースト」観、昔の仲間アイヒマンの誘拐・裁判・死刑を演じて見せるシオニスト国家、パレスチナ人＝「反ユダヤ主義テロリスト」像捻出、ホロコーストの償いとしてのイスラエル国家の「聖化」、迫害の歴史をもみ消すユダヤ人ゲットー国家擁護の欧米社会の演技、「公正」と「平和主義」とを装いイスラエル国家の「既成事実」化尊重の「二国家解決」支持、等々の見せかけは、「満洲国」を廃止できたのに新たに「イスラエル国」を創出してしまった第2次世界大戦の矛盾を抱え込んだ末期欧米中心主義ののたうち回り。イスラエル国家による新たなホロコーストに直面する現在、ナチズムによるホロコーストへの批判の当時の/そしてその後の/現在に持ち越す/失敗を、どう反省するのか。ボゴタ会議の声明は、のたうち回る「反ユダヤ主義」論議の騙しを見破っている。だが、そこから先の進路が問われているのが、人類の現在です。

下村さんが語られたように、疑問を徹底的に掘り下げながら自分自身の考えを深め高めていく思索の姿勢には、本当に学ぶべき取り組み方の真髄を教わったと感じた。永原さんが南アフリカについて説明して下さったことは、イランでも同様に旧体制シャー（国王）政治につけ込んでそれを応援し支えたイスラエルの存在が問題となる現在の局面を考える上で、「イラン革命とこれから」を「アパルトヘイト体制終焉とこれから」と併せて考える大事なヒントを頂いたと思う。

本日の定例会は、われわれの勉強会にとって全く新しいスタイルのものでしたが、基本的な問題を認識の面でも実践の面でも掴み取るきっかけを多々得ることができ、大成功でした。包容力ある竹内さんのおかげで若い方々の積極的参加を得たことも悦ばしい成果。私たちは21世紀の人類史上初めてとでも言えそうなグローバルな混迷の真ただ中で、先頭にたって少しずつでもまともな世界に変えていかなければならない。それには、疑い抜き、考え合い、交流し、協力し合わなければならない。その入口のドアが開いた感じがしませんか。共に手を繋ぎ合い、本日の集会をそのような出発点にしていきたいと思います。

北杜から：パレスチナ国家承認をまず第一にという動きがあるが、それで解決するのか、
どうかも、疑って議論する必要がある。

三浦徹：

- ・若い世代の方々の柔らかな取り組みがとても新鮮だった。
- ・反ユダヤ主義（アンチ・セミティズム、反セム主義）は、人間を「ユダヤ人」と「アーリア人」に二分する思考法で、ユダヤ人を敵とすることで、それ以外はみんな「アーリア人」（仲間）になる。いま流布している「日本人（ファースト）」と「外国人」という二分法は、まさに同じもの。
- ・知っている人と知らない人、関心ある人と無関心な人、と二分するのではなく、一緒に考えようという、本読みデモや東洋大学生有志の姿勢に共感する。パレスチナ問題に無関心な人もすべてのことに関心がないわけではない。その人の関心に近づいて考えるということが、双方にとって対話の、掘り下げの機会になる。
- ・BDS 運動の場合も、相手企業が「悪」でそれを批判する側が「善」ということではなく、対話し、共通の道を見出すことを目指しているのではないか。
- ・対面とオンラインでのご参加をありがとうございました。松本会場での懇親会でさらに議論するとともに、意見や質問があれば、事務局宛にメールでご連絡ください。

（三浦が起草した報告を、発言者に確認・修正・加筆をいただきました）。